ヤング・YOUNG・やんぐ・ヤング・YOUNG

「渋谷開発と佐賀」

松濤学舎
松尾　和磨

私が四年間の大学生活で通った街渋谷。ファッション・グルメ・スイーツ・ライフスタイルといった最先端のカルチャーや話題にあふれる若者の街といったイメージが強く、国内外関係なく多くの観光客が訪れるこの街。実はその渋谷を開発した歴史に我が故郷佐賀が大きく関係していたことをご存じだろうか。今回は渋谷開発の歴史と、そこに関わった佐賀についてご紹介したい。

江戸時代、渋谷は江戸城の西に位置する近郊農村で、そこには広大な大名の下屋敷などが建てられていた。明治維新後は都市化が進み、次第に住宅地として開発される。住宅地化された一つに松濤という地域がある。毎日のようにテレビに出てくる渋谷駅前のスクランブル交差点から西に歩いて十分ほどの所である。現在では都内でも有数の高級住宅地の一つとして有名だ。

ここは江戸時代は紀州藩徳川家の下屋敷であった。しかし明治五（一八七二）年、この元大名屋敷を鍋島家が購入し、この地に鍋島家の屋敷が建てられた。ちなみに本邸が麹町区永田町（現在の千代田区永田町二丁目の首相官邸付近）に構えられており、松濤の屋敷は別邸とされていたようだ。別邸は鍋島家の家族が利用するのはもちろんのこと、年に一回東京在住の旧佐賀藩士などを招いた盛大な園遊会が開催されていた。また鍋島家一一代当主直大は広大な敷地内に狭山茶を移植して茶園を整備させ、松濤園と名付けた。ここで生産されたお茶は「松濤」という銘で一時期は高級茶として、国内だけでなく、横浜から海外に向けて輸出されていたようだ。

製茶業については明治二（一八六九）年、東京府が旧武家地跡において桑茶栽培を奨励する政策を実施しており、その流れの中で鍋島家も取得した紀州藩徳川家下屋敷の土地において、明治九（一八七六）年に茶園を開いたようだ。ただしその茶園も明治二二（一八八九）年東海道線の全線開通により、宇治茶・静岡茶などが東京に流通するようになり不振となった。そのため明治三七（一九〇四）年、茶園を廃止し畑地とする経営方針の転換を図っている。

また大正期になると、松濤周辺地域では大規模な宅地造成が行われ、住宅地・商業地・公園・学校などが整備された。鍋島家が開発した住宅地には、上流階層の人々が多く居住し、現在の高級住宅街の基礎となっている。今では渋谷のシンボルとなった忠犬ハチ公の飼い主上野英三郎博士もここに住んでいたようだ。

ここまで簡単ではあるが、渋谷開発の歴史と佐賀・鍋島家の関係についてみてきた。私は、四年間渋谷に通った学生として、またかつては松濤にあり、今も多くの学生が暮らす松濤学舎の学舎生として、この歴史について多くの人に知ってもらいたいと思い、今回「東京と佐賀」で紹介するに至った。このような歴史を知ることで、今後新たな視点で東京・渋谷、さらには佐賀・鍋島家を見ていただければ幸いである。

筆者のプロフィール
出身地　佐賀市
出身校　佐賀西高校
大　学　國學院文学部
史学科４年

【参考文献】
・渋谷近現代研究会『鍋島家の近代を語る―東京渋谷と佐賀―』（渋谷近現代研究会、二〇二四年）
・渋谷区『新修渋谷区史』中巻・下巻（渋谷区、一九六六年）